

細胞診研究会会報

編集責任者／薄田正（国家公務員等共済組合連合会立川病院） 発行責任者／小松彦太郎（国立療養所東京病院）

多摩地区細胞診研究会のあゆみ

国立療養所東京病院

臨床研究部長（呼吸器外科）

小松 彦太郎

東京病院の薄暗い病理の部屋で第一回の細胞診勉強会が1982年（昭和57年）8月に開かれた。これが多摩地区細胞診研究会の産声であった。

私が大志を抱いて（？）東京に出てきたのは1976年（昭和51年）10月であった。名古屋大学卒業当時は大学紛争の時代で教授の半分が辞めたままの状態であった。2年半ほどドイツのケルン市立病院の呼吸器科で肺外科の修行をした。その後名古屋に戻ったが、肺癌の臨床とくに外科を志していた私には研修の場を見いだすことができなかった。高校時代から東京にでて自分を磨きたいという夢があった。無給で研修を引き受けてくれるところはあった。しかし、家族持ちの私には給料が必要であった。幸いにも東京病院を紹介してもらうことができた。

私の細胞診の勉強は、CTの平田さん（瀬戸市の公立陶生病院）、名古屋市立大学の柴田先生、当時愛知県がんセンターに勤務しておられた沢田勤也先生の指導で始まった。東京病院にきてからは独学であった。しばらくして上野さん（現在PCL）が赴任してきた。当時の東京病院の病理は、病理医2名と技師1名で、細胞診は病理医の他に2名の4名で見ていた。しかし、正式に細胞診を勉強した医師はいなかった。上野さんがきてからは私も本格的に細胞診を勉強するようになった。上野さんの紹介で癌研の細胞診に勉強に行くことができた。平田さん、都築さん、佐野さんらに指導していただく機会ができた。また、東京医大の加藤先生、小中先生とも懇意にさせていただくことができた。指導教官は沢田勤也先生で、1978年（昭和53年）5月に盛岡で指導医の資格をえた。上野さんの人柄に惹かれ、しだいに東京病院に近隣の細胞診を志す人が集まるようになった。病理の片隅にはいつも酒瓶が積まれ、勉強と飲み会が半々であった。が、細胞診にたいする士気はかなりのものであった。上野さんの他には現

在東京病院の勉強会を指導している所沢医療センターの田中さん、現在は昭和病院で勉強会を開いている森さん、全生園の鈴木さん、立川病院の谷内さん、結研の藤野さんらであった。毎回10から15症例で、大部分は病理標本のある診断の確定したものであった。また、診断に苦慮している症例についても検討した。持ち回りで自分の得意な分野についての特集も行った。上野さんの肺癌に対する経皮針吸引細胞診、田中さんの胃癌のギムザ染色などであった。ギムザ染色はどうも敬遠しがちであるが、リンパ腫や体液の細胞診だけでなく他の材料でも見るように心がけたいものである。勉強会を初めて1年後には登録された会員が50名以上で常時20名以上が集まるようになった。CTの試験シーズンともなると病理の部屋に入りきらないほどであった。神奈川、千葉、埼玉とかなり広域から集まってきた。当時は勉強会が今ほど多くなかったこと、優秀な指導者が少なかったこと、CTに対する期待が大きかったことなどのためと思われる。東京病院の勉強会を契機にしてCTになった人は非常に多く大きな成果をあげた。その後、森さんが昭和病院で大村先生と勉強会を開く様になった。また、1986年（昭和61年）に上野さんがPCLに移り、初期の勉強会としての一時期が終わった。第二次の東京病院勉強会は、同年の9月以後田島さんと田中さんの指導で行われるようになり、現在まで毎月第二金曜日にはほとんど欠かすことなく続けている。東京病院の病理の蛇澤先生、複十字病院の佐藤先生も加わり再び盛り上がってきている。

一方、東京病院と昭和病院に分かれている勉強会の仲間が一同に集まる機会をもうけようではないかとの話が持ち上がった。内容は通常のスライドカンファレンスに加え、外部から講師を招聘し、細胞学会から点数を頂けるようなものであった。1991年（平成3年）6月8日に第一回を昭和病院で開催した。講演は石井さんに依頼し、テーマは婦人科の内臓細胞診であった。同年の10月26日に東京病院で第二回の合同勉強会を行った。この日は東京病院の勉強会の100回にもあたる日であった。講演は、是松さんの甲状腺癌と乳癌の細

胞診であった。以後第三回が1992年（平成4年）7月11日昭和病院で講演は田中さんがリンパ腫について、第四回は1993年1月23日東京病院で講演は加賀谷さんで喀痰細胞診であった。

第四回の合同勉強会の打ち上げの席で、東京病院と昭和病院だけが勉強会を主催するのではなく、近隣の施設にも勉強会を主催してもらい、細胞診の輪を広げ交流を深めてはどうかという話がでた。1993年10月15日旭川市で開かれた第32回日本細胞学会秋季大会を好機に、杏林大学の藤井先生、椎名さんにも加わってもらい装いも新たに多摩地区細胞診研究会として旗揚げをする運びになった。当日は、道北病院の清水先生の好意により、旭川市内で東京およびその周辺の細胞診の仲間が沢山集まり、盛大に酒宴を催し発会式を行うことができた。1994年1月29日昭和病院で第一回（講演は畠山さんで乳腺の細胞診について）、第二回が1994年10月1日多摩癌検診センター（藤井先生が司会でテーマは硬化性血管腫について）、第三回が1995年4月1日東京病院（講演は三田さんで前立腺癌について）、第四回が1995年9月30日立川共済病院で薄田さんが主催し、講演は広井さんで臨床分子細胞学に関するものであった。いつも勉強会は熱気にあふれ有意義なものであった。次回は杏林大学の椎名さんが主催することになっている。椎名さんは今までの勉強会とは違った工夫をされているようで大いに期待したい。

今後この研究会がどのような運命をたどるのか非常に興味をもっている。それぞれの施設を中心にした勉強会とは違った何かを皆が期待している。それは仲間の輪であり刺激であらう。皆でこの研究会をより発展させていきたい。細胞診を指導する優秀な仲間が育っていくことを期待したい。我々の学問は一人でも多くの患者さんを救うためのものであり、臨床に根ざしたものでなければならない。我々の診断の後には常に病気に苦しんでいる患者さんがいることを忘れずに、お互いに切磋琢磨していきたいものである。

1996年1月24日

多摩細胞診勉強会ニュース発行によせて

平成8年1月19日

東邦大大森病院産婦人科

大村 剛

先般の多摩細胞診勉強会の折りに、担当された薄田さんからニュース発行の発案があり、早速一筆寄稿せよとの御下命

があり、拙文を寄せさせてもらいます。

小生が細胞診に魅かれたのは、入局3年目に出張した静岡県藤枝市立病院で見たパパニコロウ染色の色の鮮やかさからでした。エオジン、ライトグリーン、オレンジGとヘマトキシリンの各色の対比とシャープな染め別けの鮮明さは、今でも脳裏に焼きついているほどの強烈な印象を受けました。染色法をたずねたところ、パパニコロウ変法であるAFIP法であることを知りました。ヘマトキシリンは勿論水銀入りのオルソ社製です。帰局後上司に諮り、ドーズの数を増やし外来の棚の上に並べ、1日おき位に染色、封入、スクリーニング、レポートと一人でこなしていたところ、細胞診をやりたい人がいるので染めてやるから、こちらでやったらどうかという誘いがあり、医局に諮って中検病理で染色とスクリーニングを一緒にやるようになりました。公立昭和病院でも外来で染めていたところ、当時病理にいた田中さんに、同じように病理で染めて戴けるようになり、今思いたしても、小生のガムシヤラな熱意を汲んでいただいて、ありがたかったことだと感謝している次第です。

今こうやって多摩の皆様と、細胞を飲むように御付き合いしていただけるのも、細胞診にたいする思いが共通しているからだと思えます。その色の鮮烈さと、生命にたいする思いは、かつてのパパニコロウも同じ思いで細胞に接していたものでありましょう。各種染色法の試行錯誤の繰り返しから納得出来る染色性が得られるまで、並み大抵の気の入れようではなかったと思われます。それでも、きれいに染め別けられた標本をみて、エストロゲンやプロゲステロンとエオジンとライトグリーンの、色素染着の機構と化学反応の仕組みにも、恐らく想いを馳せていたことでありましょう。思えば小生も、染色も生体分子と色素の間の化学結合であることを、当時の細胞診教本で知りました。今ジープンの染料として普及しているインジゴの色素にしても、アフリカ大陸を知ったヨーロッパ人が、マラリヤ特効薬のキニーネを得るべく化学合成してみたところ、所期の薬剤が得られなく、抗菌力のある染料としてインドや中国で昔から使っていた色素である、藍そのものを合成してしまったことから、禍い転じて福となし、化学そのものの創始的意義のある化学合成の逸話として、色素と化学と人の関係を象徴するハプニングとして伝えられています。

最近小生は、染色のメカニズムに触発されて、化学結合の機序に関心が向き、思いを【生命と心の酸化還元譚 I、II】

として表現させていただきました。自然を存在させている大きなメカニズムを、酸化還元と表現し、小さな化学的結合と分解が、積み重なり、まるで金糸、銀糸から織り綾なされた、絢爛豪華な緞子（どんす）のように、生命がこの地球に誕生したことを、感じられるようになりました。生とは、生命に強弱秀劣の区別なく、この広大無辺の宇宙のなかで、ただ1つしかない個としての、生命の由来の神秘的な体験の感動を、伝えていけることであり、細胞の微視的差異にこだわり異常を染めわけ、悩み、問うてまた染めていく細胞診断の、素晴らしい学問としての在り方を共有できることに、感激と感謝の思いが一杯です。

日本の昔の教えに神道があります。小生、偏った考えに固執する人間ではありませんが、日本人はすべての存在に神が宿り、その存在に感謝するおおきい心を持てる民族であります。この日本に古来からある神道にも通ずる宇宙のなかの心は、最近では【生命場】と表現されているようです。まるで原子に神が宿るかの如き表現ですが、これを真似て【電子は心】ではないかなんて感慨が浮かんできます。物質は電子で結合され、人は心で結ばれる。物と者は、つなげられてこそ存在の意味がある。

グリメリウス染色における銀粒子のセロトニンに対する染色と現像、写真における感光と、金属銀を斥出させるために現像主役として使われるハイドロキノンの電子銀行としての役割り、植物における光合成と、生体におけるエネルギーの粒子化とも云える呼吸と ATP 産生に与るハイドロキノンと、チトクロームなどの鉄をはじめとする金属原子の関係は、すべて励起電子のやり取り、すなわち酸化還元であります。物を燃やすには、安定している原子の結合を、まず物質の温度をあげて電子を励起して、原子間距離をあらかじめ離しておき、励起電子に酸素原子がくっつき易くなるように、条件を設定しなければなりません。CHONS 原子で構成されている生体物質は、このような激しい酸化反応では、ガスとなり、元も子もなくなります。酵素という職人が、生命秩序を維持するために、DNA を鋳型にして用意されていますから、この酵素分子がミトコンドリアで生命資源をゆっくり酸化して、励起された電子をうまく使って、低分子から高分子を作り細胞に立体化して、別の酵素職人が、細胞表面のマーカーや、フィブリン、コラーゲン、ラミニンなどの分子糊（のり）で細胞をつなげて、生命が誕生します。電子も心も、励起されて仕事をする。やはり【電子は心】としか思えない。

【酸化還元パートⅡ】では、原子誕生と元素の周期律表作成のヒント理解のコツを述べ、分子結合と生命理解のために確立された思考の体系が、物理すなわち物の道理であることを説きました。生命はちっともむつかしくない。その生命を問う、学問を難しくしてはいけなしいし、難しく思ってもいけない。物理は化学理解のためにあり、化学は生命理解のためにある。細胞を見て、生命の尊さを知り、一生懸命このもろい、神秘と感動の存在を支え、真実と真理とを探り出し、感動存在を伝えていけるよう努力していかなければならない。

多摩地区細胞診勉強会のはじまり

BML 病理・細胞診センター

上野 喜三郎

この勉強会が始まってすでに 20 年近く経とうとしている。

先日、立川共済病院の薄田さんから第 1 回目の会報を出すので、スタート時のことを何か書いてほしいと連絡があった。引き受けはしたものの、何しろ 20 年ほども前のことで、特にその都度メモを取っていたわけでもなく、このタイトルを書くときもはたして、研修会という名称だったのか勉強会だったのかもはっきりしない。まあ、言いだしっぺの権限で勉強会とさせて頂いた。最近では勉強会から研修会へと進歩し、さらに研究会的な中身の濃い内容となってきた。

さて、この勉強会の始まりであるが、昭和 52 年に私が癌研の細胞診スクリーナー養成所を卒業し、東京病院へ就職した時、回りに細胞検査士が誰もいなく日々心細い思いで鏡検をしていた。もちろん細胞診指導医もいなく、その日に診た標本を持って癌研へ通う毎日であった。

ちょうどその頃、私より数年前に東京病院へ赴任してきていた小松先生が細胞診指導医の試験を受けたいので教えてほしいと言ってきた。私も若気のいたり、よし、教えてやろう位の気持ちで一緒に顕微鏡を覗いていたが、やけに覚えがいい。やはり我々とは頭の構造が違うと感心していたが、どうもその前から勉強をしていたらしい（未確認）。

当然、昭和 53 年に盛岡で開催された細胞診学会時に行われた指導医試験に合格された。今度は立場は逆である。その頃、私自身第 1 回目のスランプに陥り腺癌細胞と組織球の鑑別も出来ない位落ち込み、また癌研へ通う日々がつづいた。当時の癌研細胞診断部の佐野さんらに、もう一度養成所に入り直すか？などときついことを言われながらジーンと耐え

ていた。

なんとか、わざわざ癌研まで通わなくても良い方法はないかと悩んでいたところ風の噂で、近くに細胞検査士がいると聞き付け小松先生と相談し、東京病院で勉強会を開催しようということになった。

第一回目の勉強会の始まりである。

その時集まったメンバーは、田中健次氏（所沢医療センター）、森一磨氏（公立昭和病院）、坂場智子氏（東京清瀬臨床医学研究所）、谷内和恵氏（国立立川病院）、藤野光明氏（結核研究所附属病院）と小松先生、私の計7名であったと記憶している。

当初は、日頃自分たちで診ていて判定に苦慮した症例などを持ち寄っての症例検討会的な勉強会であったが、勉強会とは名ばかりでひたすら病理検査室で飲んでいただような気がする。また、それが楽しみで集まってくるメンバーもいたのではないだろうか。

しばらくはこのメンバーで月一度のペースで勉強会を行っていたが、序々に噂が広まり清瀬市近郊だけでなく、東京、埼玉からも大勢の細胞検査士または、これから試験を受けようとする検査技師が集まり多い時には50人を越える勢いであった。これも、今はすでに退官された当時の検査科長で病理の石原先生の御理解があったからと感謝しています。

回を重ねるごとに内容も豊かになり、東京病院の臨床の先生方も数人参加される様になった。

今でも印象に残っているのは、スライドどCISの症例が出た時、これから試験を受けようとしている人達が自信を持ってCISと答えているのを聞いて、石原先生が“どうしてこれだけの細胞でCISだとこたえるのか？”と不思議そうな顔をして尋ねておられたのを覚えている。当時の病理医としては当然の疑問と思われる。

また、小松先生も呼吸器系の指導医らしく婦人科でDysplasiaの細胞が出ると“呼吸器では扁平上皮癌だ”と。これも納得のいく意見である。東京病院の勉強会は、どちらかというと症例検討会が主でいわゆる細胞検査士の卒後教育的な内容であったが、参加者も増え東京病院の会場ではスペース的にも手狭となり、昭和60年に昭和病院の森さんから、これから試験を受ける人達のための勉強会を昭和病院で行いたいとの提案があり現在に続いている。

昭和62年、私自身が一身上の都合により東京病院を退職し現在の職場へ移った後、私の後任として東京病院へ赴任

した田島さんが、田中さんと共に東京病院細胞診勉強会として現在も引き続き開催されている。

東京病院を退職し、しばらく勉強会へ参加する機会がなく、数年前、久振りに案内を頂き参加したのが現在の多摩地区細胞診研究会である。内容も研究会としてふさわしい立派なもので、設立当初に比べて隔世の感がある。ただ、一つ希望を言わせて頂ければ、この勉強会が形式的な研究会にならず、家族的で暖かみのある研究会として発展されることを希望して止まない。

記憶のままに当時を振り返ってみたが、細かい記録は小松メモに託したい。

多摩地区細胞診研究会のはじまり

所沢市市民医療センター

田中 健次

昭和56年のある日、「国立東京病院の上野ですが・・・」という電話、多摩地区細胞診研究会の前進である東京病院勉強会のはじまりでした。

その当時、多摩地区における細胞検査士は10名くらいかと思います。電話の内容は、判定に悩んで困った症例、誤判定した症例など、お互いに持ち寄って勉強会を開かないかという事でした。自分自身細胞検査士になって日も浅く、経験した症例は少なく、判定に迷うことがしばしばありました。そんな訳で、より多くの症例を知り、経験したいという強い願望が常日頃からありましたので喜んで勉強会には参加しました。

当初のメンバーは、小松先生を始め、上野氏、森氏、鈴木氏、藤野氏とただ1人の女性谷内さんと、少人数でサークル的な集まりでしたが、当時の思い出は楽しいものがありました。

全員揃うには時間があり、揃う迄細胞診の話、スポーツ、政治経済、諸々の話をして時間をつぶしました。話に熱中すると喉が乾きます。お茶を入れることもありましたが、やはり喉こしがよく、美味しいものはビール。夏の暑い日なんかは最高、冷たくひやしたビールをグーっと一息で飲み干す快感、1本飲み、1人増えると、また1本と。こんな具合で、勉強会を始める頃には、いい気分となり、不思議なことに顕微鏡はよく見えるものでした。核所見、細胞質所見、そして見えないもの迄見えて来て、大胆な細胞像のよみ、確かなも

のありましたが、正診しているかどうかは疑問でした。

こんな楽しい勉強会も人が増え次第に、細胞診中心の勉強会となりました。埼玉の方面から参加する人も多く、埼玉・多摩細胞診勉強会と名称がつき活動を続けました。

勉強会の方法は、症例を鏡検し、その症例をスライドに写し、症例の検討、ディスカッションを行い、指導医の意見、話を聴くという理想的な方法でした。また人によって得意とする分野があり、その人の細胞像のよみは鋭いもので、感心させられることが多くありました。また、自分自身間違っただけの所見をよみ、判定を誤った場合などは、その細胞像が強烈な印象として残り、反省することしきり、これ程細胞診の力をつけるものはないと「その人の細胞像をよむ力は、いかに過去に多くの症例を間違っただけか、症例を多く経験したかになる」と自分自身にいいかかしています。

これから、勉強会に病理、臨床の先生方も加わる様になって、組織所見、臨床所見などを話され、更に内容の濃い充実した勉強会となりました。こんな訳で噂もかなり広がって、遠く横浜、熊谷などから参加してくれる人もいました。そんな人達をみると、大村先生の紹介で東邦大学大森病院に細胞診を習いに行ったことを思い出します。今日の自分があるのも、大村先生、東邦大学病理の人達のお陰だと感謝の気持ちで一杯になります。

それから森氏が、公立昭和病院で、細胞診受験者を対称とした勉強会を開くようになり、上野氏もBMLに勤務される様になって、当時のメンバーも変わりました。現在は、田島氏が中心となり、引き続き東京病院での勉強会を開いています。時間の許される方は、ぜひ勉強会に参加して下さい。

平成5年10月、東京病院での勉強会と、大村先生の永年の夢であった多摩地区合同の勉強会が、旭川の細胞学会で、大村先生、小松先生、藤井先生が発起人となり、年1、2～3回の合同の勉強会を開催することに、名称を多摩地区細胞診研究会とし発足しました。

この勉強会を通し、多くの人と知り合い、仲間も増えました。細胞診を学だけでなく、細胞診を通じて、多くの人との出会いがあり、親しい仲間が増えることは喜ばしいことです。今後更に、多摩地区細胞診研究会を通じた多くの仲間が増えることを期待して、研究会に参加していきたいものです。

多摩地区細胞診研究会プログラム内容

第1回 会場：公立昭和病院

(担当 公立昭和病院)

開催日：平成6年1月29日

講演：『乳腺の細胞像のみかた』

板橋中央総合病院研究所 畠山 重春

症例：乳腺

第2回 会場：多摩がん検診センター

(担当 杏林大学)

開催日：平成6年10月1日

講演：『喀痰材料におけるClassⅢaの細胞診』

①扁平上皮系について

所沢市市民医療センター

田中 健次

②腺上皮系について

国立療養所東京病院 田島 紹吉

症例：呼吸器系、硬化性血管腫

第3回 会場：国立療養所東京病院

(担当 国立療養所東京病院)

開催日：平成7年4月1日

講演：『前立腺の細胞診』

大宮赤十字病院 三田 健司

症例：前立腺、尿

第4回 会場：国家公務員等共済組合連合会立川病院

(担当 国家公務員等共済組合連合会立川病院)

開催日：平成7年9月30日

講演：『分子病理細胞学概論』

防衛医科大学校病理学第一講座

廣井 禎之

症例：呼吸器

1. 材料：肺腫瘍捺印 (杏林大学 郡)

最終診断：腺扁平上皮癌

2. 材料：気管支擦過 (複十字病院 藤山)

最終診断：腺扁平上皮癌

3. 材料：腫瘍捺印

(国立療養所東京病院 田島)

最終診断：粘表皮癌

4. 材料：気管支擦過 (公立昭和病院 森)

最終診断：原発腺癌

編集責任者後記

国家公務員等共済組合連合会立川病院

薄田 正

第4回多摩地区細胞診研究会が、平成7年9月30日 国家公務員等共済組合連合会立川病院において開催され、研究会終了後の懇親会にて杏林大学、椎名先生より「この会の会報を出してはどうか？」と言う提案がありました。たまたま担当であった私が編集長に推薦され、ここに第1回の会報を発行することになりました。この会の歴史は、約20年前に7名のメンバーで勉強会として発足し、2年前に多摩地区細胞診研究会と名称を変更しました。当時のエピソードを小松先生、大村先生、上野検査士、田中検査士に記してもらいました。さて、この多摩地区細胞診研究会はこれから細胞検査士の資格を取ろうとしている人、すでに細胞検査士の人、両者の自己研鑽の場であります。最近では、画像診断の発達とともに、針穿刺可能な病巣は積極的に細胞診を行う傾向が強く、それだけに細胞診領域が広がり、困難な症例も多くなってきました。また、鑑別診断のみではなく、免疫組織化学、分子病理学的手技を駆使し、腫瘍の機能診断、予後判定までも判定しなければなりません。この研究会では、細胞診に携わっている人の質の向上をはかり、親睦を深めてゆきたいと思います。多摩地区細胞診研究会に変更してからの第1回から第4回までのプログラム内容（講演内容は小松先生と重複）について記載しましたが、症例報告は第4回のみ記載しました。尚、原則として研究会は年2回、会報は年1回の予定です。

最後に、皆様に原稿等をお願いすることもあるかと思いますが、その際はご協力を頂きたいとよろしくお願い申し上げます。